

南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査

—海洋採集遺物からみた海上交通—

Preliminary Investigation into Discovering Sunken Ships in the Southwest Islands

—Underwater Artifacts and Marine Transportation—

宮城弘樹・片桐千亜紀・新垣力・比嘉尚輝

MIYAGI Hiroki・KATAGIRI Chiaki・ARAKAKI Tsutomu・HIGA Naoki

ABSTRACT: This paper reports the results of preliminary investigations of surface artifact distributions with the aim of discovering sunken ships in the Southwest Islands. The ultimate purpose of the project was to register underwater concentrations of artifacts which may relate to shipwrecks. Coastal surface collections and the site locations are introduced here.

Many sites with artifact concentrations were found and registered as possible locations of sunken ships. Further steps must be undertaken, including the designation of such sites as cultural properties. The time span of this investigation included the medieval, pre-modern and a part of the modern period.

1. はじめに

沖縄県は唯一の離島県である。島嶼性の特性を活かした考古学研究を手がけ、陸上の遺跡についてはこれまで多くの成果が見られる。一方、當時水中に没している水中遺跡の調査事例は圧倒的に少ない。その中、海から引き揚げられた遺物が拾われ、報告者の勤め先へ持ち込まれ、採集された遺物に接する機会があった。このため筆者らは、海から拾われた遺物が散布する遺跡の取り扱い等について日常酒席をともにする交友関係も手伝いよく話し合うことがあった。

今回の海底遺跡基礎調査を行うことで、このような「遺跡がどれだけあり」、また「潜在的にどれだけある可能性があるか」を調べることからはじめよう、と話し合い、宮城を代表者とし笹川科学研究助成による研究助成を受けて、「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査—海洋採集遺物からみた海上交通—」として2003年4月から調査を行っている。

今回の報文はこの調査報告であり、先に沖縄考古学会定例研究会で口頭発表した内容を文章化させたものである。報告は、沈没船に関連する情報を整理し、採集されている遺物を分析、最終的には海上交通の復元を目標としている。

2. 調査方法

1) 調査の意義 南西諸島は花綵列島の愛称で呼ばれ、洋上に浮かぶ大小約200の島が南北1,000kmに連なる。北から大隅諸島・吐噶喇列島・奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島と連なり与那国島で国境を境に台湾となる。その地理的位置から歴史上、日本本土の南から北上する文化流入口とし交流・交易の窓口になり、環東シナ海の要衝に位置することから東アジアの海上航路上重要な位置にある。特に奄美諸島は海上航路に連なる島の様子から「道の島」の別称をもち、海上交通の要所として機能した。史書に登場し確認されるだけでも、古代には遣唐使の南島路として機能し、中世から近世には沖縄本島に琉球王国を育む素地をつくった。日本開国を誘引した西洋船の往来も南西諸島を足がかりにした事はよく知られている。また、当然のことながら国内交通には、島々の往来に船が利用されていた。こ

そのため、その航路上には船の往来を示す遺跡や遺物が残されていると考えられ、近年各市町村教育委員会の文化財調査によりこれらの遺跡が具体的に調査される事例もある（林ほか1999・大濱1994）。このような、海上交通にかかる海底の遺跡を集成し海上交通を復元することは、島嶼県沖縄の歴史を紐解く上で極めて重要である。

2) **調査の目的** 今回の調査では、本格的な沈没船発見を第1の目的とし、洋上交通の復元を研究の終着点としている。当面の目標である沈没船発見に係る情報収集として以下の調査を実施した。

1. **海洋採集遺物の調査** すでに海岸や海底より採集された遺物の事例を調査し、分類、時代、船籍、輸送品、規模などを推定し具体的な海上交通の復元材料とする。
2. **文献資料の整理** 古文書等から通史的に南西諸島を往来した船舶を追及し、座礁、沈没記録からその地点を特定する。
3. **分布調査・範囲確認調査・有無確認** 海上交通に頻繁に利用される地域などを踏査し遺跡発見を目指す。

3) **情報の整理** 先ず始めに、沈没船にかかる遺跡と遺物の情報収集から着手した。そもそも考古学の対象とする遺跡がいったい幾つあるのかということに、管見に及ぶ範囲で収集することを行った。また、採集された遺物が沈没船に関わる事例か、海難事故等による事例か、はたまた陸上の遺跡に関わる散布なのかは今後さらに詳細な検討を必要とする。今回は収集できた主な事例について次章で具体的に紹介したい。

遺物の採集例は地元の方の持ち込み以外にも多く耳にする。例えば今帰仁村では戦争直後、海人（ウミンチュ）が海岸から採集した壺に古銭が大量に入っていたが、フルガニヤーに引き渡したため現存しないとう話がある（註1）。このような話は特に漁師などによって伝えられることが多く、読谷村長浜でもこのような伝聞が採録されている（知念1978）。

他方、海難事故の具体的な事例が近世の文書で幾つか見られる（赤嶺1988、比嘉1990）。勿論このような文献に登場する全てが船体の沈没を証明するものではないことは明らかで、むしろ沈没した事例に関しては文献にすら現れないと考えた方がいいのも事実である。そして沈没事例の全てが遺跡として現在まで残っているとも限らない。それでも、いくつかの漂流・座礁事例について現地で遺物を確認することができた。このような文献事例の整理を行うことによって本格的沈没船発見の契機となることが期待される。また、文献で確認できる事例において悉皆調査を実施し、海難事故の傍証としての遺物散布の確認調査を実施することも望まれよう。

さて、沈没船に関する情報については上記した以外で陸上の遺跡からもこれを推定することができる。具体的には港や造船所などの船に関する陸上の拠点施設、唐人墓（ex：恩納村仲泊）やオランダ墓（ex：名護市屋我地・国頭村宜名真）、大和（人）墓（ex：今帰仁村運天・勝連町浜比嘉）などと呼ばれている船員の遺体の引き上げ事例を伝える墓などである。その他、検証は難しいものの、民話や地名、民間伝承に見られる船に関する情報なども興味深い。例えば地名として唐船小堀（ex：今帰仁村今泊地先・座間味村阿児の浦）、オランダ浜（ex：久米島町東奥武地先）、大和干瀬（ex：恩納村仲泊地先）などについても興味深い事例でありこれらの地名はかなり多いと思われる。

以上、紹介した事例はいずれも沈没船や港、船に関する間接的な情報であり、これを整理することによって遺跡の発見に繋がるものと期待される。他方、海の情報を整理し座礁した船が無いか可能性を探ることも一つ重要である。例えば海上保安庁が整理する海図からは干潮時に海上に表れるリーフの所在を確認することができる。これによって普段の航行中に座礁しやすいポイントを探すことができる。また、戦後の記録が主であるが、海上保安庁がまとめている座礁や難破・事故の記録から、事

故の集中する地域を中心に調査対象とすることもできる。この方法は広大な海で闇雲に沈没船を探すよりも有効であると考えられる。

4) 現地調査の手法 主として考古学的な調査によって沈没船に関連すると推定される遺物を確認することからはじめた。まずは採集された遺物の確認である。遺物の多くは県内各市町村教育委員会などによって保管されているものが主であるが、一部は個人保管のものなどがあった。これらの事例で採集地点を追調査で確認できたのは、未報告のものを含め10例ほどある。採集された主な遺物は陶磁器であるが、中にはバラストや錨などもある。また採集地点は特定できないが稀な事例として碇石なども確認されている。

次に遺跡の所在地についての確認調査を行った。実際にシュノーケリング等による潜水調査を実施した。この点が今回の調査における大きな特徴でもある。調査の対象とした遺跡は遺物が採集されている地点のほか、近世の文献記録に確認され伝承される座礁地点についても数例調査することとした。この潜水を伴う調査については3つの点に注意した。

- 1. 安全の確保** これは水中での作業であるため、一人で潜ることは避け数人で確認しながら行った。数人で行ったのには安全確保のほか、遺物の分布する範囲を陸上もしくは、船上より確認することを行うためでもある。
- 2. 遺物があるのか無いのか** 即ち遺物散布が認められれば遺跡として認知していく必要性が高く、今後詳細調査を行う必要があると考えられる。このため遺物の有無という点に注意した。今回の調査目的の一つである。
- 3. 過度の遺物採集は避けることに十分注意する** 遺物の有無確認及び範囲確認が目的であるので、当然遺物を採集することを行わなければ調査の意味がないと言われそうであるが、逆に過度の採集は遺跡破壊につながると考えたため避けた。この点に注意することが日常業務として遺跡保護にあたる筆者らに与えられた責務であると考えている。

やや前置きばかり長くなつたが、今回の調査を簡単に言えば、既に引き揚げられている遺物についてはなるべく所在を確認し実測をすること、採集されたと言われている場所については採集地点を特定するとともに遺物の散布、船体の有無などの現状を確認すること、記録に登場する事例についても同じように踏査を行うことである。

3. 調査概要

今回は下記の日程で沈没船記録や遺物散布の情報が得られた地域を対象に調査を行った。また、2週間に1回程度で文献の収集や情報の整理を目的とした勉強会を適宜実施した。

第1次調査（2003年4月29日）

沖縄島国頭村宜名真地先英國商船遭難の地（p地点）調査、宜名真オランダ墓調査、バラストを石材として利用された事例の調査（国頭村奥・宇嘉、大宜味村、今帰仁村）、引き揚げ錨の調査（国頭村奥）、宜名真沖シュノーケリング調査。

体制：陸上踏査 宮城弘樹・新垣力・比嘉尚輝

海底調査 片桐千亜紀・中山晋・松永洋平（浦添添市教育委員会）

シュノーケリングによる海底調査の結果、リーフ上やリーフ下の砂地で清朝染付碗等の遺物を確認。遺物の保存状態は良く、水摩はあまり受けていないものが多い。また、引き揚げられたバラスト等は国頭村、大宜味村、今帰仁村に石碑等として転用されている。（写真1・2）



写真1 宜名真のオランダ墓



写真2 奥のバラスト

第2次調査 (2003年5月30日～6月1日)

久米島町オーハ島 (b 地点)・はての浜 (a 地点) 地先調査、海底に散布した陶磁器の範囲確認。
体制：陸上踏査 宮城弘樹・新垣力

海底調査 片桐千亜紀・中山晋・小川光彦 (金沢大学修士課程学生)・山本祐司 (カメラマン)
シュノーケリングによる海底調査の結果、はての浜やオーハ島の海底において多数の遺物を確認。
はての浜海底の遺物は小破片が多く、摩滅が著しいものが多い。オーハ島海底の遺物は比較的保存状態が良く、水摩はあまり受けていない。久米島自然文化センター収蔵のはての浜・オーハ島表採遺物の集計や分類・実測を実施。(写真3～6)



写真3 はての浜へ向かう



写真4 はての浜海底遺物散布状況



写真5 オーハ島海底調査風景



写真6 久米島自然文化センターでの実測風景

第3次調査（2003年6月6日～6月9日）

石垣島名蔵湾（f地点）採集の八重山博物館所蔵陶磁器及び先島文化研究所所蔵陶磁器調査。

体制：陸上踏査 宮城弘樹・新垣力・比嘉尚輝

調査の結果、名蔵湾シタダルの海岸で多数の遺物を確認。八重山博物館や先島文化研究所では関連した遺物を実見。（写真7・8）



写真7 名蔵湾近景



写真8 八重山博物館での実測風景

第4次調査（2003年7月12日）

伊江島伊江村湧出海岸（j地点）調査。湧出海岸に散布した陶磁器の範囲確認

体制：陸上踏査 宮城弘樹

西銘章（嘉手納高校教諭）

海底調査 片桐千亜紀・中山晋

秋本真孝（元北谷町教育委員会）

シュノーケリングによる調査の結果、リーフ内の窪みから褐釉陶器片を確認。干潮時に陸上となる海岸付近では多量の遺物が石灰岩に取り込まれるように集中していた。（写真9～11）



写真9 湧出海岸遠景



写真10 湧出海岸海底調査風景



写真11 湧出海岸遺物散布状況

第5次調査（2003年9月25日～28日）

宮古島上野村宮国地先ロベルトソン号座礁地点（0地点）、宮古島平良市池間地先八重干瀬プロビデンス号座礁地点（1地点）、多良間島多良間村高田海岸（n地点）座礁ファン・ボッセ号引き揚げ遺物の確認。

体制：陸上踏査 宮城弘樹・新垣力・比嘉尚輝

海底調査 片桐千亜紀・中山晋

プロビデンス号座礁地及びロベルトソン号座礁地付近の海底調査を実施したが、関連するものは発見できなかった。またこれとあわせて島内にあるロベルトソン号に関連するとされるバラストや、博愛記念碑（平良市）などの調査を実施した。多良間村高田海岸において染付碗や褐釉陶器を確認。同資料館では引き揚げられたヨーロッパ製陶器瓶を確認し実測を実施。（写真12～17）



写真12 野原公民館のバラスト



写真13 平良市の博愛記念碑



写真14 吉野集落のバラスト



写真15 高田海岸近景



写真16 高田海岸遺物散布状況



写真17 多良間村立ふるさと民俗学習館での実測風景

第6次調査（2003年10月2日～10月4日）

座間味島座間味村阿護の浦（d地点）引き揚げ遺物の確認、シュノーケリングやスキューバーダイビングによる海底調査。

体制：陸上踏査 宮城弘樹・新垣力・比嘉尚輝

海底調査 片桐千亜紀・中山晋・仲宗根瑞香
(沖縄県立埋蔵文化財センター)

スキューバーダイビングによる調査の結果、様々な器種の沖縄産陶器を確認、状態が良く破片が大型である。また、少量だが中世に比定される遺物（中国産褐釉陶器片）を確認。座間味村教育委員会所蔵の阿護の浦海底引き揚げ遺物を確認し、集計と実測を実施。慶良間海洋文化館を見学、阿護の浦表採資料を確認。（写真18～20）



写真18 阿護の浦遠景



写真19 阿護の浦海底調査風景



写真20 座間味村交流センターでの実測風景

4. 遺跡（確認地点）の紹介

本章では、既に周知の遺跡に加え、今回の調査によって確認された地点について紹介する。紹介にあたっては通常遺跡名称を用いるが、今回はアルファベット記号で地点名を示すこととした。その理由は今後、遺跡を直接的に保存管理する市町村教育委員会によって名称が決められることがよいと考えたことと、当該地点はあくまでも遺物採集地点であり追調査によって厳格に検討されるべきと考えたためである。また、今回の報告で遺跡が公にされることによって、宝探し的な調査の対象となり遺跡が滅失する恐れを避けるということも理由の一つである。既に報告書等によって遺跡名が付されているものに関しても今回は便宜上アルファベット記号で紹介するが、引用文献や文面を読んで頂ければいずれも周知の遺跡であることが理解されると思われる。

これまで沖縄諸島で採集、引き揚げの確認されている事例は多数ある。前述した様に陶磁器をはじめ、碇石や錨、バラストなどが海底採集遺物として知られている。年代については12世紀～19世紀の間の資料が断続的に確認されている。その他、沖縄戦時の沈没船と関連資料も多数知られているが、これについては今回の調査の対象としなかったため省略する。

地点名	場所	採集資料	保管場所
a 地点	はての浜	龍泉窯系青磁割花文碗・同安窯系青磁皿・等	久米島町自然文化センター・沖縄県立埋蔵文化財センター・久手賢稔（個人蔵）

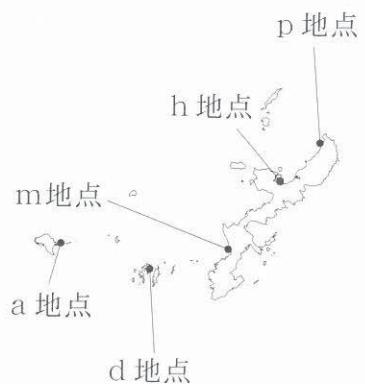
12～13世紀

地点名	場所	採集資料	保管場所
b 地点	オーハ島地先	龍泉窯系青磁無文外反碗・同皿・同盤・等	久米島町自然文化センター・久手賢稔（個人蔵）
c 地点	伊計島地先	龍泉窯系青磁碗	海の文化資料館
d 地点	座間味村阿護の浦	褐釉陶器	沖縄県立埋蔵文化財センター
e 地点	塩屋湾	青磁	保管場所未確認
f 地点	名蔵湾	龍泉窯系青磁碗・同皿・同盤・白磁碗・等	先島文化研究所・石垣市教育委員会・沖縄県立博物館・八重山博物館
g 地点	瀬長島地先	青磁碗等	沖縄県立埋蔵文化財センター
h 地点	今帰仁村今泊地先	青磁皿・等	今帰仁村歴史文化センター
i 地点	久米島白瀬川河口	青磁・白磁・天目・石器	保管場所未確認
j 地点	伊江島北海岸	龍泉窯系青磁細蓮弁文碗・明代青花・褐釉陶器	保管場所未確認
k 地点	那霸港	青磁破片（鳥居 1953）	東京大学の資料が該当か？

14～16世紀

第1-1図 遺跡確認地点

地点名	場所	船名	船籍	年代	採集資料	保管場所
a 地点	はての浜	不明	不明	不明	染付	沖縄県立埋蔵文化財センター
d 地点	座間味村阿護の浦	不明	不明	不明	沖縄産陶器	座間味村教育委員会
h 地点	今帰仁村今泊地先	不明	不明	不明	染付	今帰仁村歴史文化センター
l 地点	八重干瀬	プロビデンス号	イギリス	1795	バラスト・等	池間島 (未確認)
m 地点	北谷町地先	インディアン・オーク号	イギリス	1857	染付碗・皿・褐釉壺・ワイン瓶・等	北谷町教育委員会
n 地点	高田海岸	ファン・ボッセ号	オランダ	1857	染付碗・皿・壺類・散蓮華・ヨーロッパ陶器	多良間村立ふるさと民俗学習館
o 地点	上野村宮国地先	ロベルトソン号	ドイツ	1873	バラスト (鉄)	野原公民館
p 地点	国頭村宜名真地先	不明	イギリス	1874	染付碗・バラスト (石)	国頭村奥・宜名真



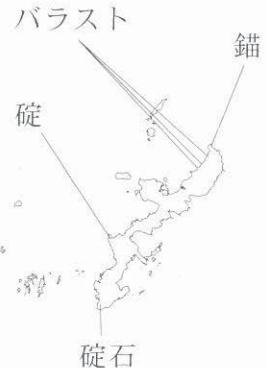
l 地点

n 地点

o 地点

17~19世紀

地点名	場所	引き揚げ資料	保管場所
不明	恩納村山田グスク	碇石	メーガー
a 地点関係?	久米島町宇江グスク	碇石	久米島自然文化センター
p 地点関係	国頭村宜名真	バラスト (石)	国頭村奥交流館
p 地点関係	国頭村宜名真	バラスト (石)	国頭村宜名真
p 地点関係	国頭村宜名真	バラスト (石)	国頭村宇嘉
p 地点関係	国頭村宜名真	バラスト (石)	大宜味村役場慰靈碑
p 地点関係	国頭村宜名真	バラスト (石)	今帰仁村運天為朝上陸碑
p 地点関係	国頭村宜名真	錨	奥漁港
o 地点関係	上野村	バラスト (鉄)	上野村野原公民館
不明	城辺町吉野海岸採集	バラスト (石)	吉野民家
n 地点関係	多良間村高田海岸	錨	多良間村資料館



碇

バラスト

錨

碇石



バラスト

バラスト

バラスト・イカリ

第1-2図 遺跡確認地点

a 地点（久米島町ナカノ浜）12世紀中～13世紀前半・16世紀後半～17世紀前半

はての浜（註2）は沖縄県久米島町東奥地先の「はての浜」と呼ばれる長大な砂丘地の北側に所在する。遺物が採集される地点は「ナカノ浜」と呼ばれる全長8kmある砂丘のほぼ中央にあり、1994年に新垣義夫氏が採集した資料を、宜野湾市の講演会で講師として訪れていた手塚直樹氏に見せたことにより注目されることとなった遺跡である。

第2図1～4・6は西銘章氏が久手賢稔氏より借用し県立埋蔵文化財センターに一時保管されていた資料である。既に同氏に返却済みである。5は久米島自然文化センターに保管されている資料である。7～11は金武正紀氏・金城亀信氏・城間肇氏が表採した資料で県立埋蔵文化財センターに保管されている。

第2図1～4は龍泉窯系青磁碗で体部内面に劃花文を施す。1は口縁部資料で5区画した体部内面に花文を施す。2～4は底部資料で見込みに「金玉満堂」の銘款（2）や靈芝文（3・4）を施す。6は同安窯系の青磁櫛描文皿で内底に十字文とジグザグ文様を組み合わせて描く。5は久米島町自然文化センターに保管されている資料で採集地点はa地点ではなく、b地点（オーハ島地先）からとなっているが資料の年代観等から当該地点とした。これらの資料については既に久手賢稔氏のもとに返却済である。7は龍泉窯系青磁劃花文皿である。年代については、大宰府編年（宮崎ほか2000）によれば12世紀中頃～13世紀後半に整理されている資料である。類似する出土例として倉木崎海底遺跡（林ほか1999）が知られている。倉木崎海底遺跡は鹿児島県奄美大島の宇検村に所在しており、焼内湾の入口にある枝手久島との間にある比較的浅い海峡の海底一帯に陶磁器が散布している。1995～1998年、4次にわたり確認調査が実施され2,300点余の遺物が引き揚げられている。陶磁器が主で過半数は龍泉窯系劃花文青磁碗、同安窯系櫛描文皿などで、この点も今回調査で得られた陶磁器のバリエーションと酷似する。11は中国産陶器と考えられるが、水磨の影響を著しく受けしており詳細は不明である。8は褐釉陶器の底部で、器種は小形の長胴壺と考えられる。

これら以外にも、点数こそ少ないが16世紀後半～17世紀前半頃の帰属年代を与えられる興味深い資料が含まれる。9は色絵で漳州窯系の五彩盤と考えられるが、上絵がすべて剥落しているため、文様は判然としない。10は染付で口縁こそ欠損するが輪花口縁を呈すると思われる芙蓉手の碗で、内底には花鳥文などを描く。いずれも管見の限り首里城跡のみで出土している優品である。

上述のようにa地点には2つの時期のまとまりがあると推定され、後述するb地点も本地点と近接しており仮にこれらの遺物が船舶の座礁・沈没を示す事例であるならば、この海域は海難事故の頻発した難所であったと推定される。また久米島の地名の中にオランダ浜とされる地名があるが（仲村1992）、これもやはりオランダ船の座礁に由来する地名とされる。

b 地点（久米島町オーハ島）14世紀後半～15世紀前半

久手賢稔氏によって多量の遺物が採集され、200点余が久米島自然文化センターに保管されている。他にも、当センターには仲里村教育委員会（当時）によって採集された遺物も保管されている。当該遺跡は法政大学の探検部によって遺物分布調査が実施されているが、一般に報告公開されておらず調査の詳細については不明な点が多い。また、雑誌にも取りあげられる（大竹2002）など認知度も高く、比較的容易に遺物が採集されていることも事実である。第3図に採集された主な資料を図示した。

1～4は龍泉窯系の外反口縁を呈する無文碗である。口縁部端に丸みをもち、腰が張り、底部は幅広で、見込みに印花文を施すものもある。釉薬は厚くかかる特徴がある。5～7は福建・広東系の外反口縁を呈する無文碗である。口縁部端に丸みをもち、高台の成形は粗く施釉が徹底していない。見込

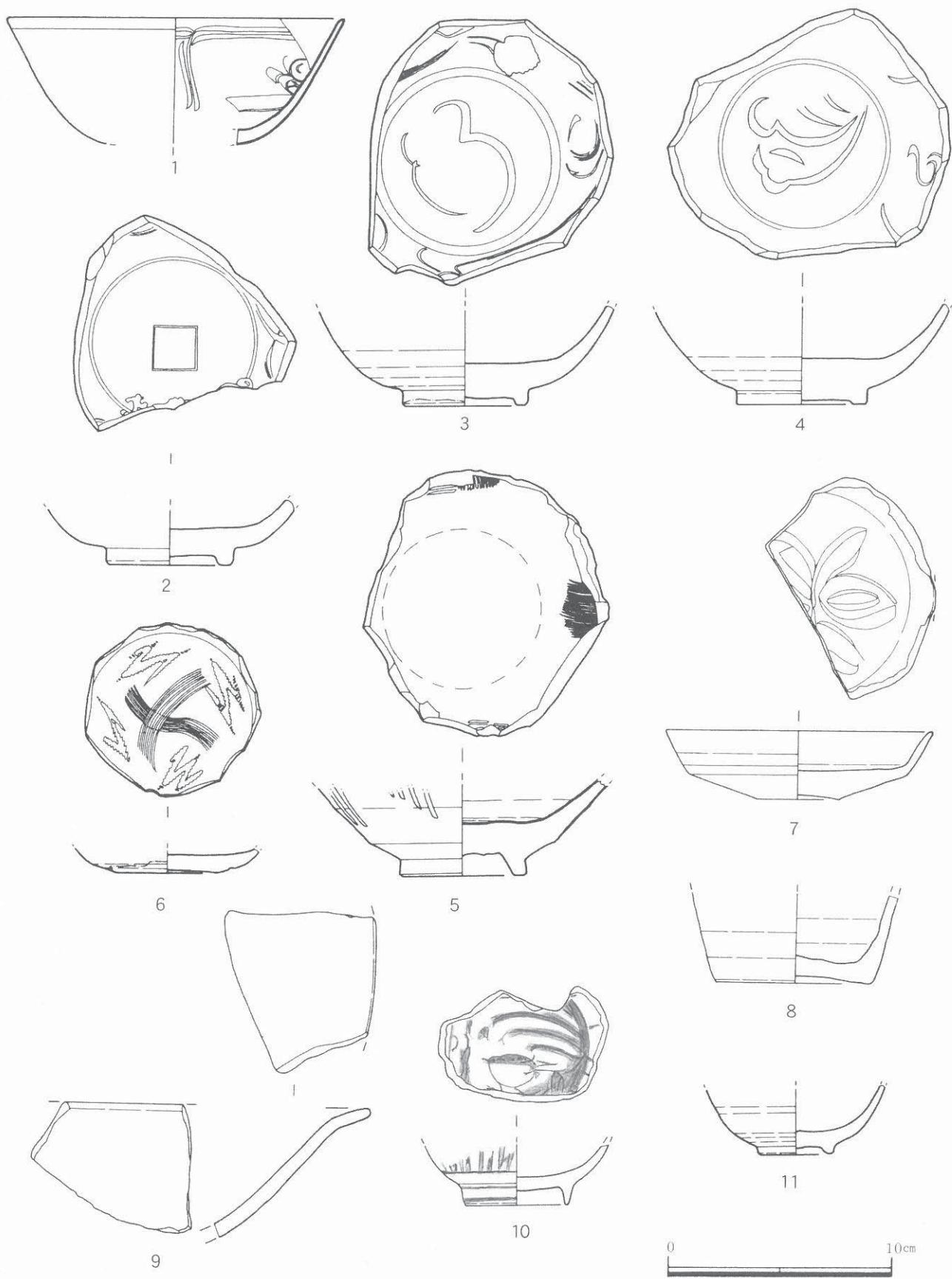


図2 a地点（久米島町ナカノ浜）表採遺物

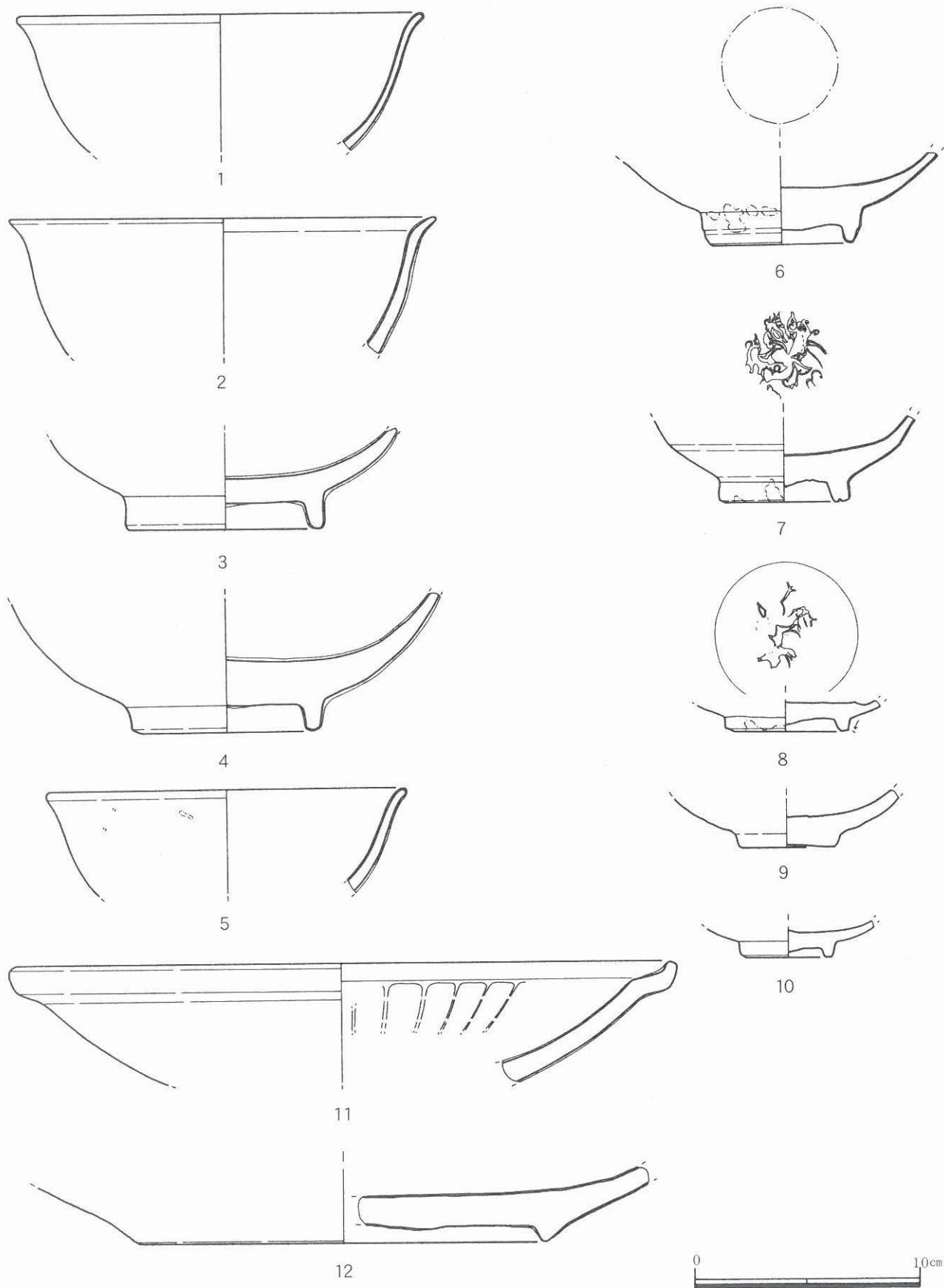


図3-1 b地点(久米島町才一八島)表採遺物

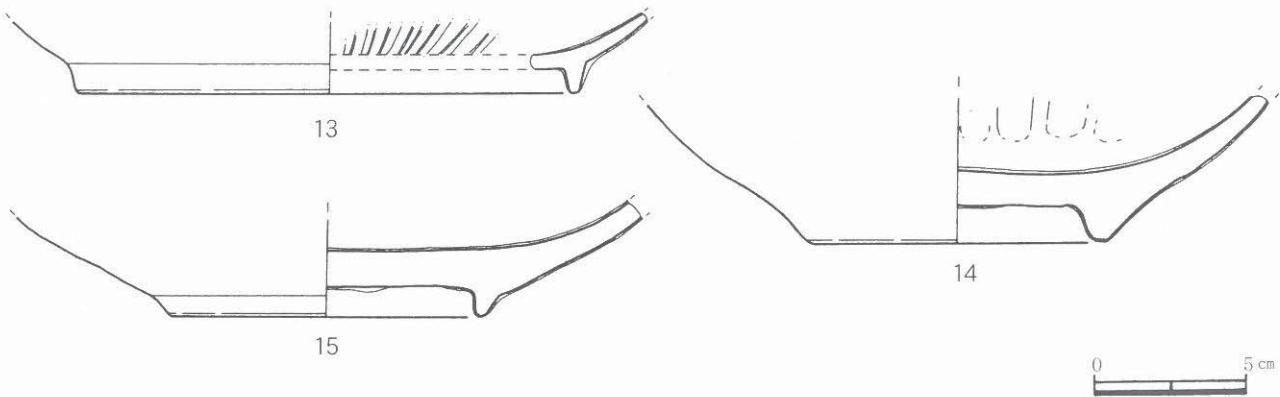


図3-2 b地点（久米島町オーハ島）表採遺物

みを釉剥ぎするもの（6）や印花文を施すもの（7）がある。8～10は皿の底部資料である。8は見込みに印花文を施す。9は上底状の底部を呈する。11～15は盤である。11は鍔縁口縁を呈し、内面に幅広の蓮弁文を描く。12・14・15は臥足と呼ばれる削り出しの高台をもつもので、外底を蛇の目状に釉剥ぎする底部資料である。13は幅広の高台を持ち、器壁が薄く内面に細い蓮弁文を描く底部資料である。

主体資料となる青磁無文碗は金武正紀氏が今帰仁城跡の出土資料から1383年～1415年を中心にして招来された資料群としているもの（金武1990）に類似しており、やや幅を持たせて14世紀後半～15世紀前半の資料群と考えられる。

c 地点（伊計グスク近く）14世紀後半～15世紀前半

ダイバーの棚原盛秀氏によって採集された資料で、沖縄産陶器などとともに青磁破片が採集され、現在与那城町海の文化資料館に数点保管されている。資料は青磁の無文碗で底部は幅広、釉は厚くかかる特徴があり、見込みには印花文を施す。これもb地点と近い年代の資料で14世紀後半～15世紀前半の資料群と考えられる。ただし、当該資料は採集点数も少なく資料の年代にはらつきがあることから、陸上の遺跡と関わる資料とも推定される。採集地点等の聞き取り調査を実施していないため、詳細については今後の追調査を待ちたい。

e 地点（カンサガニク遺跡）15世紀代

呉屋義勝氏らによって採集された資料で、青磁破片が数点採集されている（岸本ほか1984）。これもc地点と近い状況と考えられ、採集点数も少ないため、陸上の遺跡と関わる資料とも推定される。

f 地点（名蔵シタダル遺跡）15世紀中頃

沖縄県内で最も多くの資料が採集され、大濱永亘氏によって報告される著名な遺跡である（大濱1994）。当該資料の大部分は先島文化研究所に2,342点保管されている（大濱1999）。他にも、日本水中考古学会によって調査された遺物が石垣市教育委員会に保管されているとのことだが、今回は確認できなかった。また、ジョージ・H・ケアによって採集された遺物が沖縄県立博物館に保管されており、これらは既に多方面に紹介されている（沖縄県立博物館1982）。同様の資料が八重山博物館に保管され

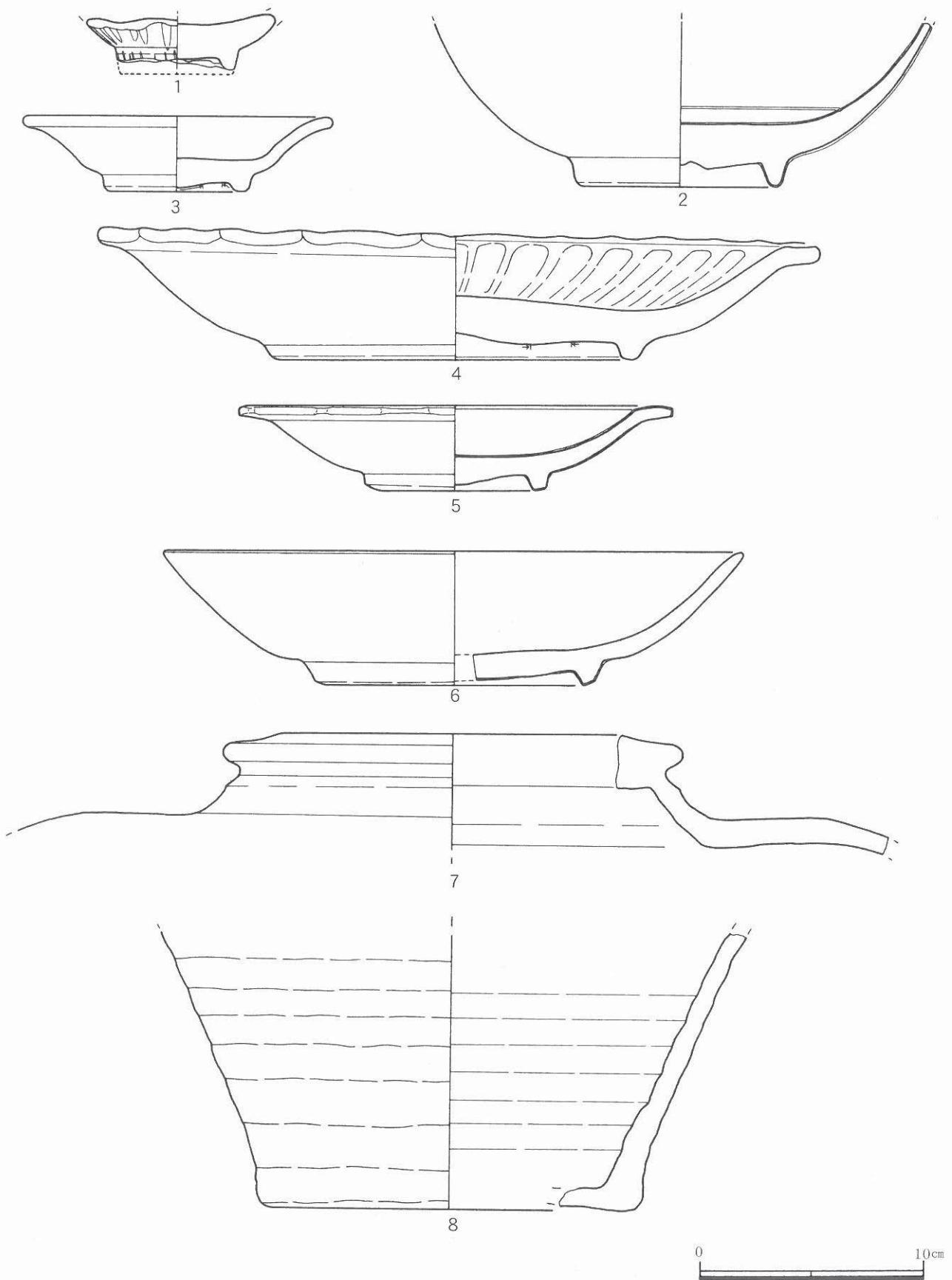


図4-1 f地点（名蔵シタタル遺跡）表採遺物

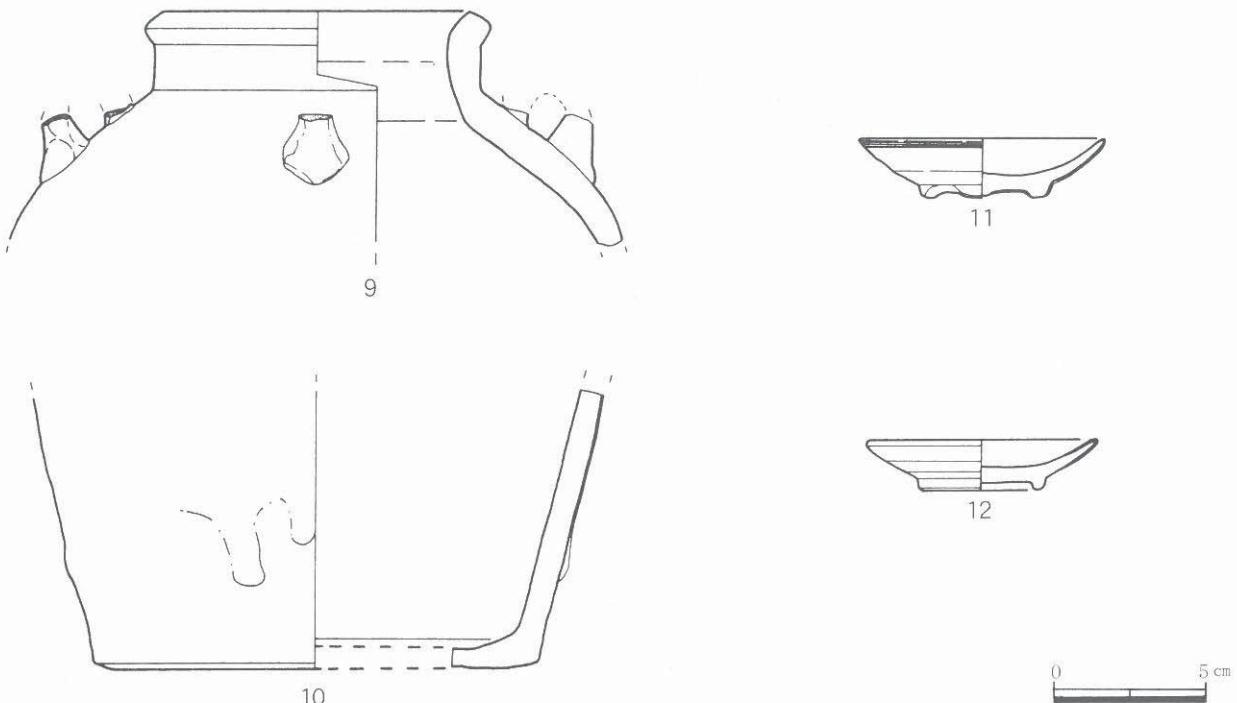


図4-2 f地点（名蔵シタダル遺跡）表採遺物

ているので、今回はこの八重山博物館の保管資料を紹介する（第4図）。

1は小形の碗で片切り掘りによる蓮弁文が施される底部資料である。2は大形の無文外反碗の底部資料で、高台の削り出しあは浅く腰が張る。3～6は盤で、大小・器形にバリエーションが認められる。3は腰が張り、外反口縁を呈する。4・5は稜花盤で、大型で内面に幅広の蓮弁文を施すもの（4）や無文のもの（5）がある。6は無文で直口口縁をもつ。7・8は中国産の褐釉陶器で首里城などによくみられるタイプのものである。9・10は褐釉陶器壺で、縦耳の付くナデ肩器形である。11・12は森田分類D群（森田1982）で抉高台のものと、切り高台にならないものがある。これらの資料群は首里城跡京の内SK01（金城ほか1998）の類品を多く含み15世紀前半から中葉頃を中心とした年代観が妥当と考えられる。

g地点（瀬長島）15世紀中～16世紀前半

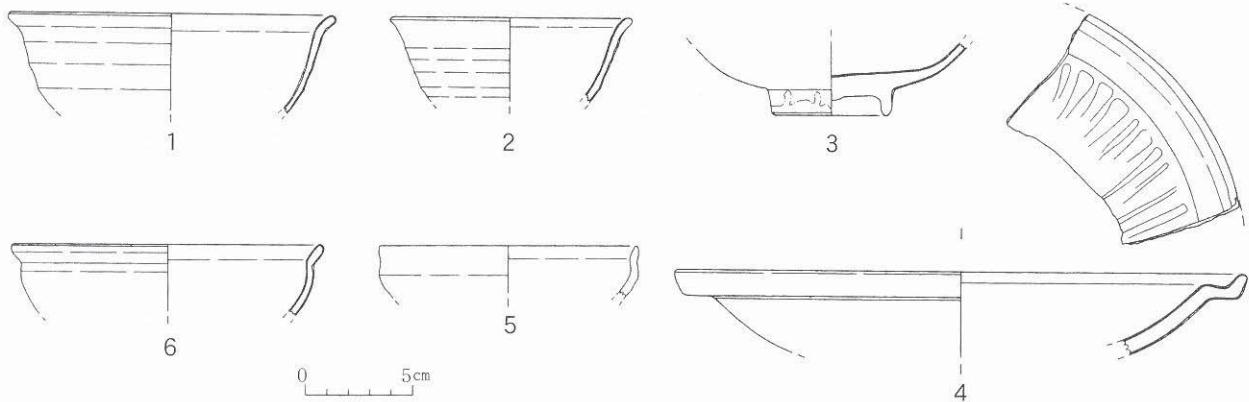
西銘章氏（嘉手納高校教諭）によって採集された資料で、青磁破片が数点採集されている。これも15世紀頃の資料を中心とするものだが、c地点と近い状況と考えられ陸上の遺跡と関わる資料とも推定される。今回現地踏査を行ったが遺物の散布を確認することはできなかった。

h地点（今帰仁村今泊海岸）15世紀中～16世紀前半・19世紀？

仲渠村智氏（文化財パトロール員）によって採集された資料で、今帰仁村歴史文化センターに持ち込まれた。青磁数点が採集されている。他にも海岸で打ち上げられた資料があるが、点数や状況からc地点と近い状況とも考えられる。最も近いと考えられる遺跡として志慶真川上流の今帰仁城跡がある。このため港と関わる遺物とも考えられる。この他にも近世の中国産陶磁器が資料として引き揚げられている。港湾の証左として遺跡近隣には唐船田（トーシンダー）、唐船小堀（トウシングムイ）、湊（ナートウ）などの地名が点在する。今後詳細検討が期待される。

i 地点 (久米島白瀬川河口) 14世紀～15世紀

1998年、浚渫土砂から小川真司氏によって陶磁器が採取された。これらの陶磁器について、當眞嗣一氏は近傍にグスクが立地すること、近くに唐船池（トウシングムイ）と呼ばれる地名が残ることなどから、グスク時代に重要な港があったと推定し注意を喚起している（當眞・佐久田1999）。第5図に報告された陶磁器を図示した。青磁（1～4）、白磁（5）、天目茶碗（6）のほか石器が採集されている。



第5図 i 地点 (久米島町白瀬川河口) 表採遺物 *原図 當間・佐久田1999

j 地点 (湧出海岸陶磁器散布地) 15世紀後半～16世紀代

干潮帯岩礁に陶磁器が散布することが報告され、周知の遺跡となっている（岸本ほか1999）。遺物は岩礁のくぼみに石灰化する岩に取り込まれる形で多数付着する。採集遺物は田畠によって詳細が報告されている（田畠1999）。第6図は田畠によって青磁細蓮弁文碗（1～3）、青磁雷文帶碗（4）、青磁碗底部（6）、白磁底部（5）が図化され15世紀代として説明する。細蓮弁文碗などの年代から考えると15世紀後半～16世紀頃の中で整理できると考えられる。今回の調査では当該遺跡の現地調査を実施し、岩礁帯の外側海底に遺物散布が見られるかどうかを、シュノーケリングによって確認したが思う以上に深く遺物は褐釉陶器が1点認められたのみであった。今後スクubaダイビングによって再調査することが望まれる地点の一つである。



第6図 j 地点 (湧出海岸陶磁器散布地) 表採遺物 *原図 田畠1999

k 地点 (那霸港)

当該地点は沖縄で最も有名な港の一つで、鳥居龍蔵氏によって「海底に中国宋代の青磁の破片が無数に沈没しているところがあり、私はこの陶片を著しく採集した」と報告されている。さらに当該資料の散布を「陶器を船載して来て、ここで難船したから、その陶器がかく海中に残存する」と推定するなど海底遺跡研究において学史上大きな足跡を残している（鳥居1953）。当該地点での現地調査は軍港であることもあり断念したが、今後これらの遺物散布が現在もあるのかどうかを確認する必要はあると考える。なお、鳥居の採集した遺物の所在は不明である。

Ⅰ 地点 (宮古島八重干瀬, プロビデンス号) 1797年座礁

1797年5月17日池間島地先の八重干瀬で全長約33m, 400トン級の帆船が座礁した。この船は1795年、地図上の空白部分だった北太平洋地域を調査するためにイギリスを出帆し、マカオを基地に探検したとされる。乗組員112人は別の帆船に乗り移って宮古島に寄港し、手厚いもてなしを受け、23日にマカオに引き返したとされる。この探検船プロビデンス号の船体や遺品を探し当てる海底調査が1996年、地元の青年らでつくる「プロビデンス号を語る会」(仲間章郎会長)が進めている企画で実施され、海底から金属反応が出たとされる(琉球新報1996)。この金属反応が座礁地点であるか関連については分からぬが、金属反応があったのは水深15m、すり鉢状の底部分で「岩だらけ」という。池間島の漁師らはかつて八重干瀬から大砲を引き揚げたことがあるとされ、港に置いてあったという。また、他にも銀食器なども海底から引き揚げたとされるが、いずれも現存しない。また、未確認であるが池間島改善センターにはプロビデンス号のものと思われる鉄製のバラストがありこれにはイギリス海軍のマークであるイカリが印刻されているという。いずれも聞きとりである。今回の潜水調査では遺物の散布を確認することはできなかった。

Ⅱ 地点 (インディアン・オーク号の座礁地) 1849年座礁

1840年8月14日にイギリス東インド会社のインディアン・オーク号が北谷町沖でリーフに乗り上げ座礁した。座礁地点の調査が1984年に棚原盛秀氏とその同好会のメンバーで行われており、外洋から銅板や銅釘が検出され、海底には半径100mにわたって人頭大の黒褐色の円礫が無数に散乱しているとされる。染付碗・皿、大型褐釉陶器、彩色陶器、角柱瓶、ワイン瓶などが採集されている(中村1994)。また、散布している礫は帆船の安定を保つために利用されたバラストと推定され、以前に前田四郎によって奇岩として報告された経緯がある(前田1967)。

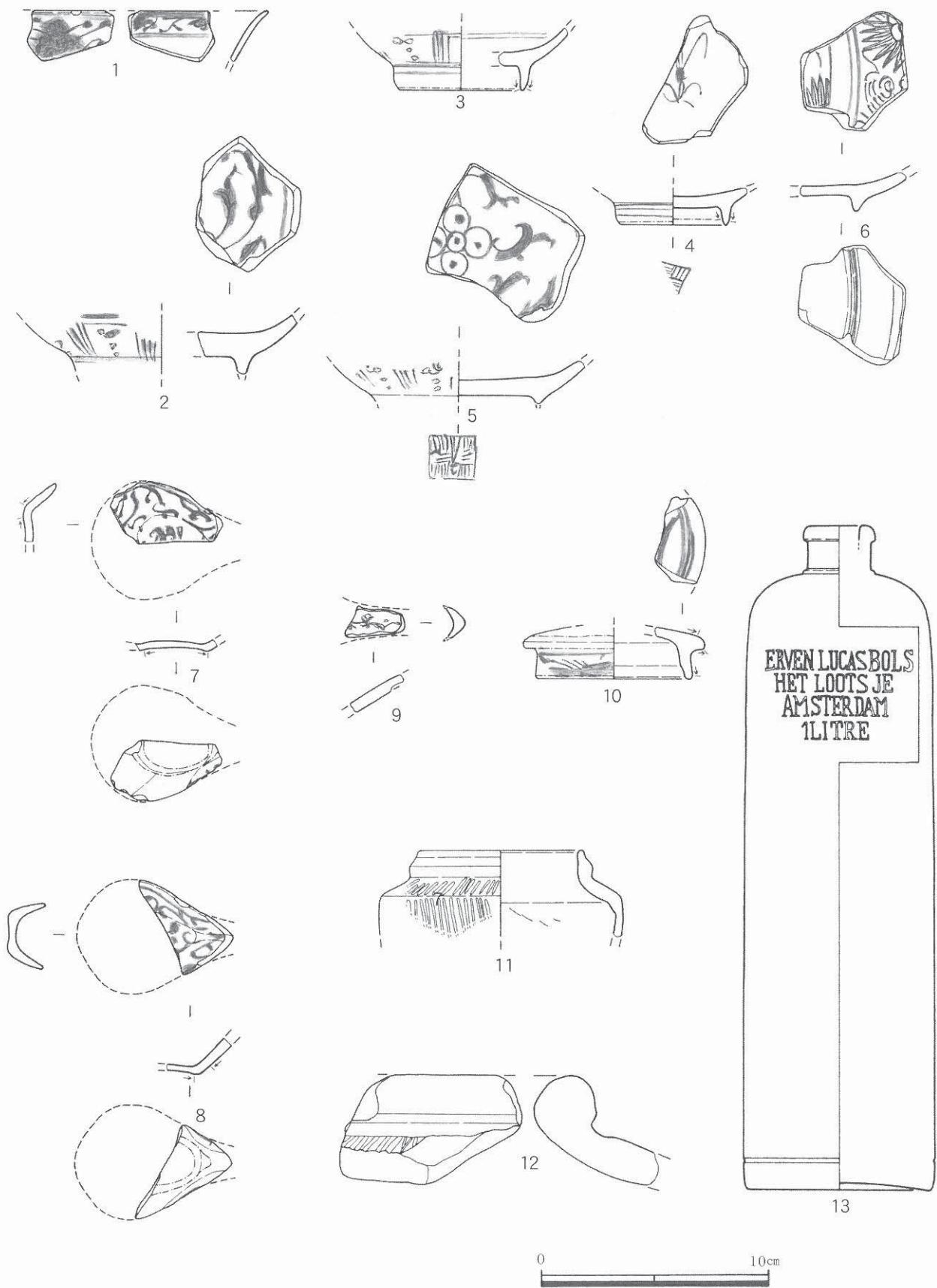
Ⅲ 地点 (多良間島高田海岸沖、ファン・ボッセ号) 1857年座礁

多良間村高田海岸はオランダ商船遭難の地として『球陽』(球陽研究会1974)に記載されており、1983年、村の史跡指定を受けている。この船は後の研究によって、上海からシンガポールへの航海の途中に座礁・沈没したファン・ボッセ号であったことが判明している(金田2001)。沖縄県教育委員会によって2度(1997年、2000年)踏査されており、碗・皿・壺・蓋・散蓮華などの清朝染付とともに、本土産陶磁器や産地不明の陶器が表採された。これらの遺物は沖縄県立埋蔵文化財センターが保管している。第7図及び写真27・28に示したものは主な遺物であり、いずれより詳細な検討を行い報告する予定である。また、多良間村立ふるさと民俗学習館には上記の清朝染付の類似資料に加えて、完形のヨーロッパ製陶器瓶(第7図13)が展示されている。その他、個人所蔵となっている資料もあるとされるが、詳細は不明である。

Ⅳ 地点 (宮古島宮国沖、ドイツ商船ロベルトソン号) 1873年座礁

1873年にドイツ商船R. J. ロベルトソン号が暴風により座礁難破し、地元住民の救助によって無事本国へ帰国した。この報告を受けたヴィルヘルム一世は博愛の心を称え島に博愛記念碑を建立した。

地元では海岸から表採された鉄の棒や石が引き揚げられるがこれらがロベルトソン号のものは不明である。当該座礁地点とその物語は地元によって美談として語り継がれ、現在村づくりのキーワードとして深く心に刻まれる物語となっている(エドワルド1995、新里1996)。このような村の座礁船に対する想いから、大がかりな沈没船探査がおよそ15年前に実施されている。調査はダイバー数人で期

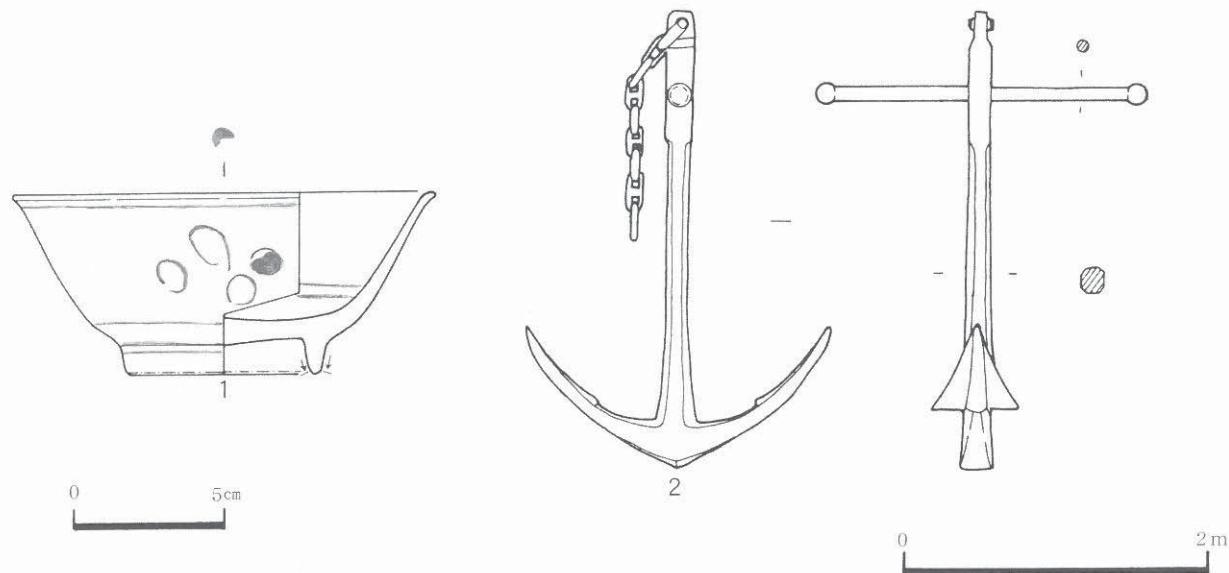


第7図 n地点（多良間島高田海岸）表採遺物

間約2週間をかけ広範囲に実施したと言うことであるが、沈没船の発見には至らなかったとされる（註3）。今回の調査では当該座礁地点と推定される場所の踏査を行ったが、遺物を確認することはできなかった。今後より詳細な踏査を実施したい。確認されている関連引き揚げ遺物として野原公民館に保管される鉄製のバラストがある。長さ72cm、幅14cm、厚さ14cmの方柱状で頭部には穴が開いている。

p 地点（国頭村宜名真沖、イギリス商船）1874年座礁

1874年にイギリスの商船が暴風により難破遭難し、船員5人が生存したが多くの方が溺死したとされる。4人の遺体が漂着し村民によって丁重に葬られ、現在オランダ墓として漂着した海岸近くに安置される。このオランダ墓に、難破船が漂着した際に船倉にあったとされるバラストが縁石として利用される。埋設されているため地表面での確認だが12個を数える。他にも同様のバラストが隣字の宇嘉で8個、奥で1個、特種な事例として大宜味村や今帰仁村では石碑の材となっている事例があり。管見に及ぶ範囲で23個である。大きさは厚みが16~21cm、幅が58~61cmとなっており規格性の高い板石を利用したバラストと考えられる。長さは確認できた最大のもので、310cmである。この他にも関連資料として錨が海底から引き揚げられており（奥のあゆみ刊行委員会1986）、現在記念碑として奥漁港で見ることができる（第8図1）。今回の調査では錨の確認と実測、引き揚げバラストの所在確認と計測などを行った。また、座礁地点と推定される場所のシュノーケリング調査によって清朝染付碗や酒会壺、褐釉陶器等を確認することができた。



第8図 P地点（国頭村宜名真沖）関係遺物

q 地点（宮古島吉野集落）不明

宮古島城辺町の吉野集落内に石製（花崗岩？）のバラストが保管されていることを、下地和広氏（城辺町教育委員会）より情報をいただいた。長さ123cm、幅31cm、厚さ20cmの方柱状の資料で、p地点の資料と類似する石材であるが、形状はやや異なる。庭先に置かれていたのでお住まいの方に情報を求めたが、既に他界したおじいさんが海から拾ってきたものであるとのことで、具体的な採集地点は不明である。

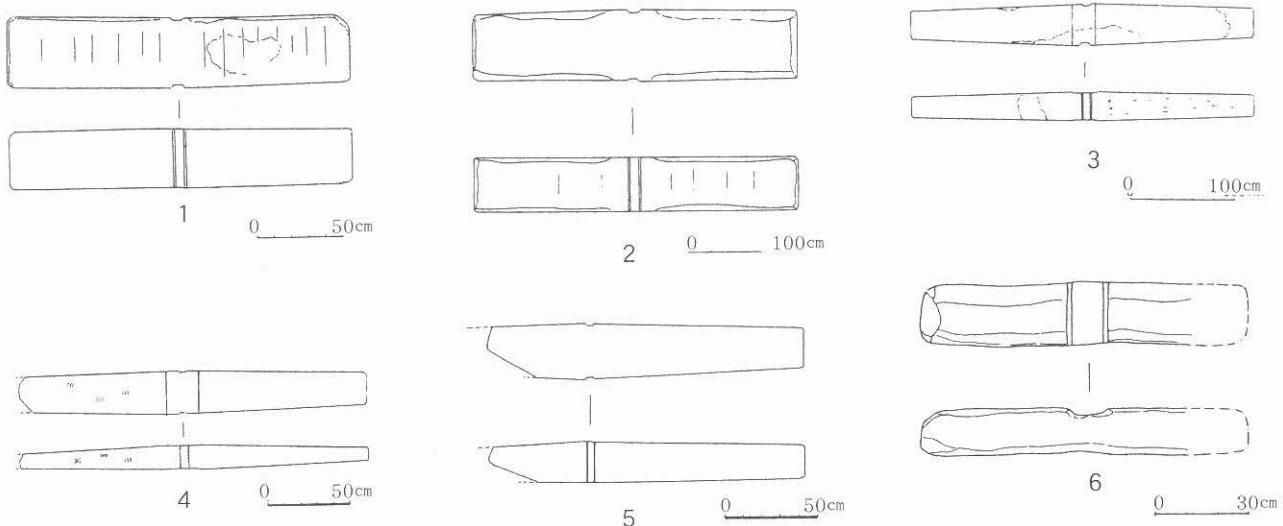
d 地点 (座間味島阿護の浦) 15世紀頃・19世紀頃?

座間味島阿護の浦は中国との交易船や進貢船が風待ちのため利用した場所と伝えられ、その記録も多数見られる。また、「唐船グムイ」と呼ばれる唐船を繫留したと伝えられる深場もある。地元ダイバーの宮平聖秀氏によって、多数の沖縄産陶器が阿護の浦海底より引き揚げられ、現在座間味村教育委員会によって保管されている(第9図)。資料は上焼と荒焼があり多様な器種がみられる。上焼と称される施釉陶器は鉢(1), 火入れ(2・3)・双耳瓶(4)が、荒焼は壺(5・6)・瓶(7)・鉢(8)・水甕(9)があり、特種なものとして厨子甕(10)も確認された。

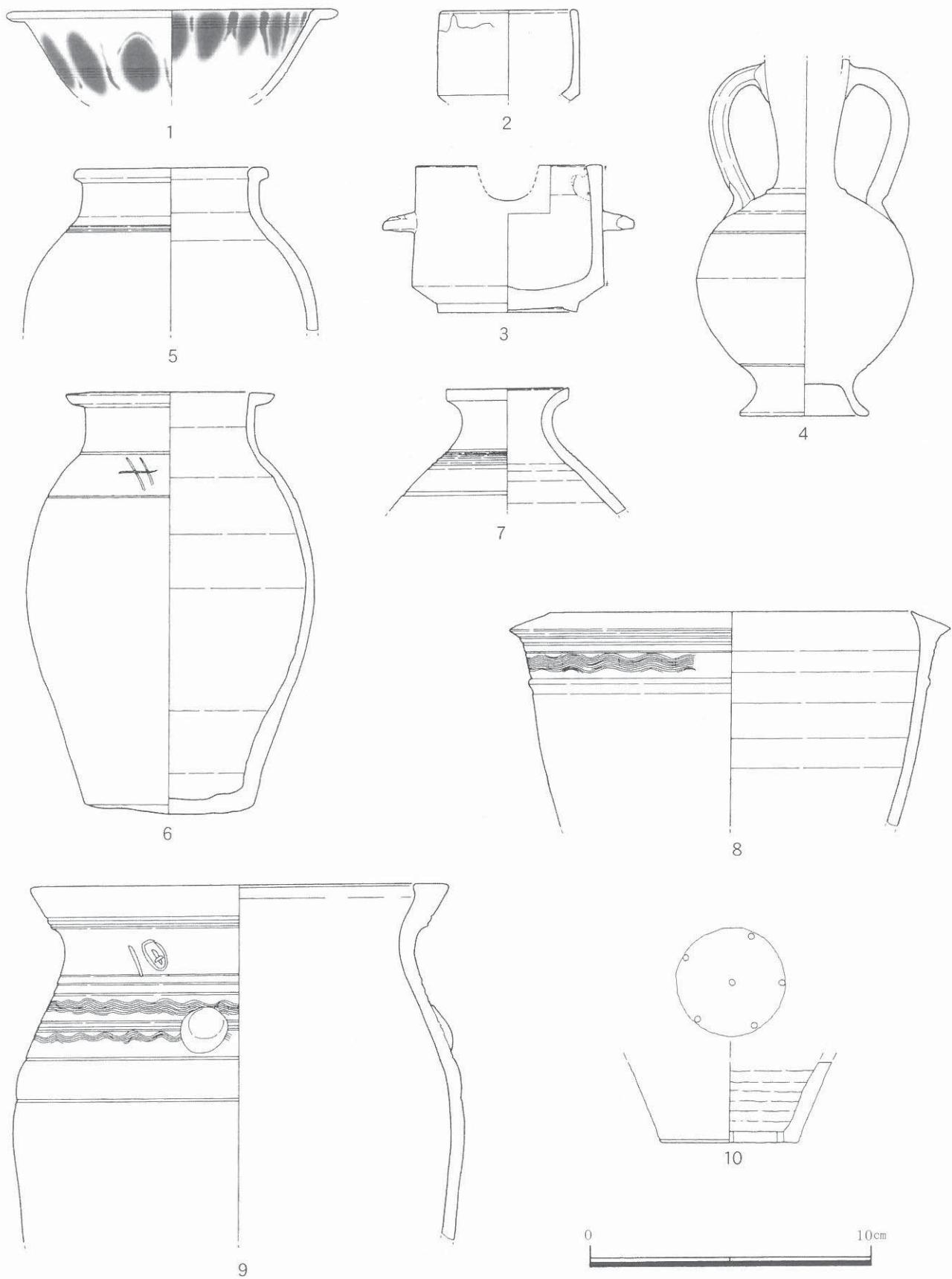
時代としてはこれまで紹介した事例のものよりも新しいが、このように様々な器種がまとまって確認されたことは興味深い。今回の海底調査ではこれらの新しい時期の遺物の他に中世に比定される褐釉陶器片も確認された。また、慶良間海洋文化館には阿護の浦海岸で表採したとされる14~15世紀頃のものと考えられる中国産青磁が展示されていることから、さらに詳細な調査を行うことで当該時期の遺物が多数発見される可能性もある。

他にも、陶磁器散布事例とは別に碇石が数例確認されている。「東アジアを舞台に広範な活動をしていた交易船の航跡を示すもの(柳田1994)」として近年注目される資料で、南西諸島の事例は既に當眞嗣一氏(當眞1996)によってまとめられており、第10図に示した6例が確認されている。1・2は龍郷町のイカリ浜採集品とされている事例で角柱形を呈する。3は具体的な採集地点不明だが奄美大島の龍郷町内の民家に保管されており、角柱対象形の資料である。同型の碇石は宇江城で表採された事例(4)と山田グスク麓のメガラーの井桁石に利用された事例(5)があり興味深い。もう一例は糸満市の道脇に石敢當に利用された表品(6)が知られている。當眞氏はさらに、松岡史氏の集成と分類(松岡1981)をもとに糸満市の事例(6)を考慮して分類の追加を行っている。

しかし、これらの碇石はすでに海底より引き揚げられてしまったものであり、船の場所を推定する材料とするには困難である。原位置に近い場所での碇石の発見は船が沈没した具体的な場所を推定する有効な材料となるため、今後海底で詳細な調査を行うことで、新しい碇石が発見されることを期待する。



第10図 南西諸島の碇石 *原図 當眞1999



第9図 d地点（座間味島阿護の浦）表採遺物

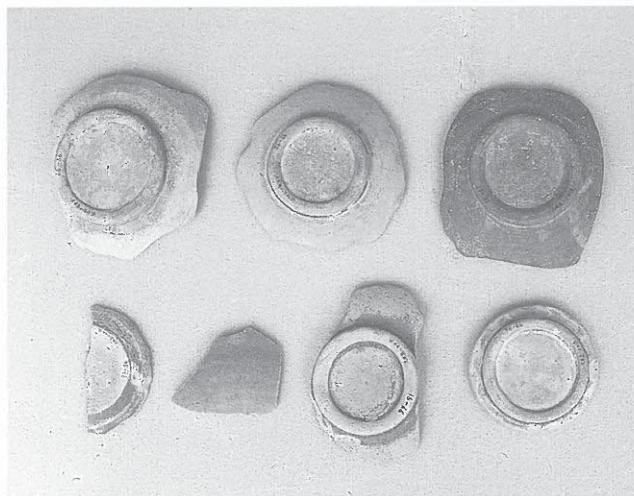


写真21 はての浜海底表採遺物①

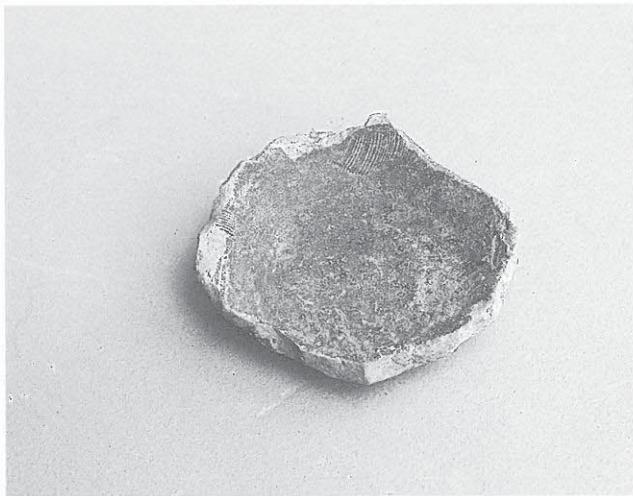


写真22 はての浜海底表採遺物②

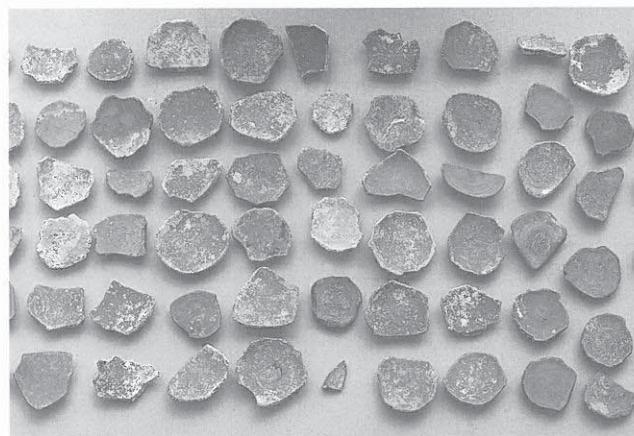


写真23 オーハ島海底表採遺物①

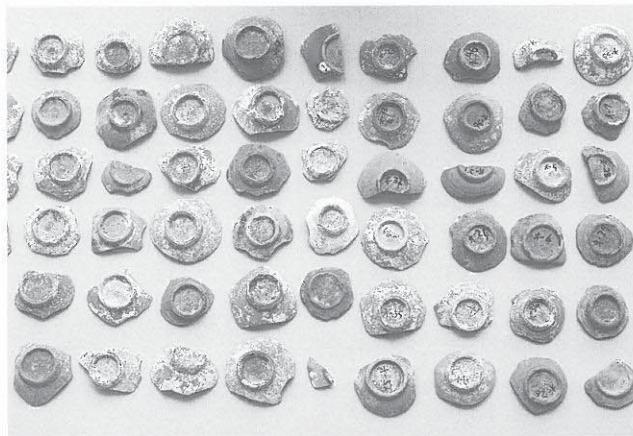


写真24 オーハ島海底表採遺物②



写真25 名蔵シタダル表採遺物①



写真26 名蔵シタダル表採遺物②

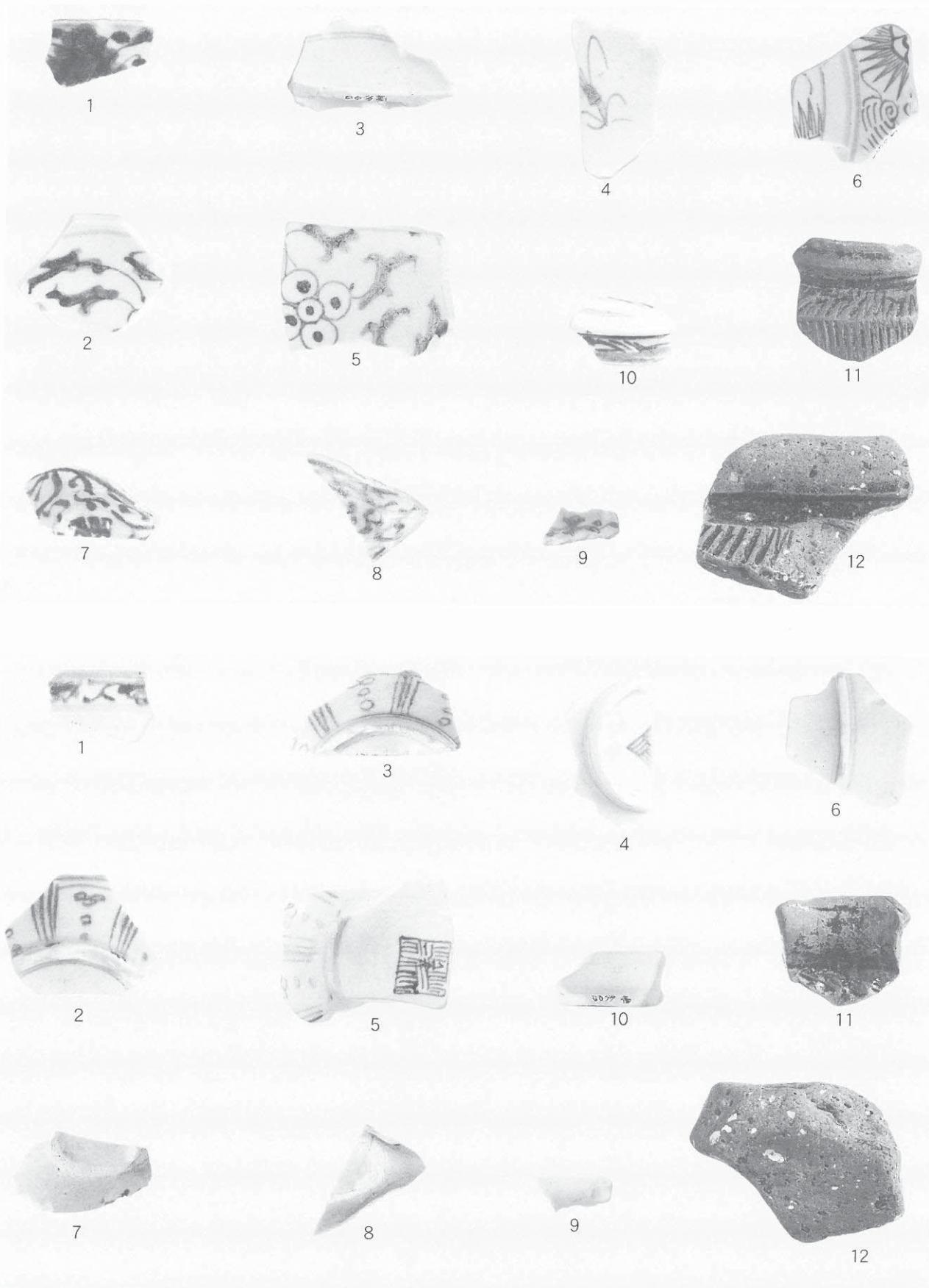


写真27 高田海岸表採遺物 (第17図 1~12)



写真28 高田海岸表採遺物（第17図13）

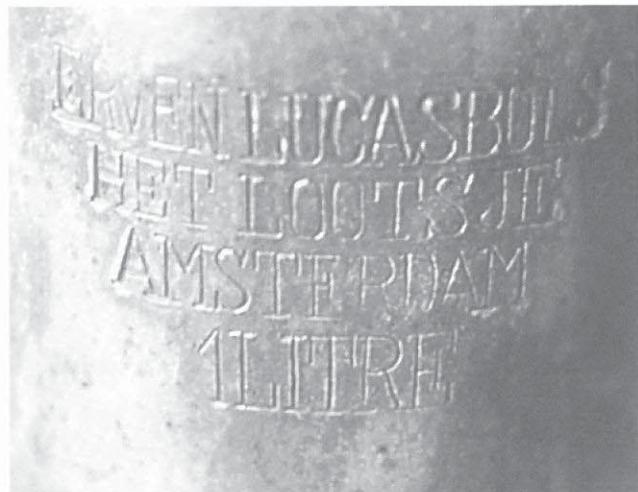


写真29 高田海岸表採遺物（同左文字部分）



写真30 宜名真沖表採遺物（第8図1）

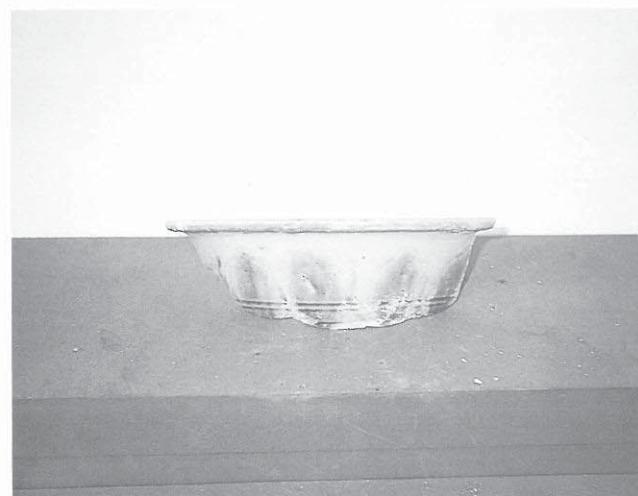


写真31 阿護の浦海底表採遺物①（第19図1）



写真32 阿護の浦海底表採遺物②（第19図4）



写真33 阿護の浦海底表採遺物③（慶良間海洋文化館）

5. おわりに

以上今回12世紀から17世紀までは遺物の採集事例を中心に、18世紀以降については記録から沈没船と関わりのある事例について、沈没船発見の可能性がある地点の紹介を行った。約1年間の情報収集作業で17地点の散布地を確認することができた。遺物に時期的なまとまりがなく、採集散布量が比較的少ないc・e・g・h・i地点の事例を省き、12地点が海上交通の船舶に係る遺物散布事例と推定した。繰り返しになるが、私たちは沈没船関連と言うからといって、必ずしもこれらの全ての遺物採集事例を沈没したとは考えているわけではなく、座礁による積荷の捨て荷や漂到着に係る遺物散布である可能性もあり、あくまでも海難事故に係る可能性の高い遺物散布状況を示しているということを断っておきたい。勿論、沈没した船体そのものがそこにあるという可能性も無いと言うことでは無く、いずれにしても散布地の一つ一つに関して詳細な検討を行っていくことをこれから作業することが重要である。

最後に、今回採集・引き揚げを確認することのできた各地点について特に陶磁器を中心に検討してみたい。グスクや集落など遺跡調査の多くの場合、遺物は年代幅を持って出土し、一括遺構など仮に共時性をもつたものでも、消費地という観点から様々な資料が出土する。他方、共時性は高いが生産地では生活感が無くどのようなスタイルで消費者が需要したのかは推してはかれない。この点について今回紹介したような遺物散布地は陸上の遺跡と比して陶磁器の流通形態を検討するうえで重要な資料である。野上建紀氏はこれを生産地と消費地を結ぶ「流通遺跡」として提唱している（野上1999）。生産地から消費地に向かう途上、なんらかの海難に遭遇し廃棄あるいは沈没を余儀なくされた資料として「どのように流通したのか？」に答えられる遺跡として捉えることができる。この観点から見ると、今回のような海洋から採集された陶磁器については12～19世紀に沖縄島内で消費された陶磁器が、はたしてどのように流通したのかに答えられる遺跡として捉えられることが可能である。今回の採集地点について時期を大きく分けると4つの時代に分けることができる。これを仮にⅠ～Ⅳ期として紹介していく。

I期（～13世紀） グスク時代以前の遺物である。長い先史時代南西諸島の海域における交流は島嶼間の往来を基本とした有視界航行による交流交易が主であったと考えられる。これを打開したのは南島路の開拓や中世商人による活動などがあったのであろう。しかし、現在段階で古代における密接な交流交易を沖縄島内の先史遺跡に見いだすのは困難である。12世紀頃になって中国商船や博多商人を介在した北からの物流が沖縄の寄港地の一つとして船舶が往来したと考える。もしかすると南海の物産をもとめ、沖縄島等を目的地として船舶が往来していたのだろう。奄美大島の倉木崎海底遺跡や今回紹介したa地点などの12世紀代の遺物を主体とした沈没船関連遺跡あるいは、海揚がりの碇石などは往時の船舶が事故等で座礁沈没した一つの証左と考える。

II期（14世紀～16世紀） 沖縄島を中心に、浦々、島々にクニが誕生する。やがて1458年尚泰久王の命により鋳造、首里城にかけられた「万国津梁の鐘」の銘文に記される「琉球国は南海の勝地にして、三韓の秀を集め、大明をもって輔軍となし、日域をもって唇歯となすこの二中間ありて湧出する蓬萊島なり。舟楫をもって万国津梁となし、異産至宝は十方刹に充满す（原文漢文）」に見られるような、日本本土・中国・朝鮮・南方諸国との交易を行った躍動的な国家琉球が誕生する。14世紀代の陶磁器を散布する海岸としてb・f・i地点がある。b地点は久米島地先にあって那覇港より西にあり、中国への渡海あるいは中国から那覇港までの重要航路上にある。これを勘案すると中国からの貿易を想起したいが、陶磁器にバリエーションが無く確認されているのは現段階では食膳器だけである。したがって、中国を往来した商船等の積み荷の一部もしくは国内水運の座礁・捨て荷などを考えておきた

い。ただし、b地点はf地点とならびかなり広範囲に遺物が散布している事実から考えて今後の調査によっては様々な種類の器が採集される可能性は高い。一方、f地点は既に2,000余点の遺物が採集されており県内で最も遺物が多く散布する地域である。琉球王国は当該期には既に中継貿易で富を得ており隆盛期を迎える。ここでは陶磁器以外にも古銭なども採集されているが、今後イカリやバラストあるいは船そのものの座礁を示す船材などが発見されることを期待したい。

Ⅲ期（近世）琉球の史書『球陽』には多くの船舶座礁の記録が記されている（球陽研究会1974）。今回この全ての座礁記録の地点を実見することはできなかった。文献と現場が確認でき、遺物散布が認められるのは下記の地点である（註4）。

l地点（池間島地先八重干瀬）1797年 イギリス海軍 プロビデンス号

m地点（沖縄島北谷沖）1840年 イギリス東インド会社 インディアン・オーク号

n地点（多良間島高田海岸沖）1857年 オランダ商船 ファン・ボッセ号

o地点（宮古島宮国沖）1873年 ドイツ商船 R. J. ロベルトソン号

これらの4地点ではイカリ・バラスト・陶磁器が採集されておりいずれも外国籍の大型船で、日本、中国や東南アジア地域を往来した外国籍の船である。南西諸島海域でやがてこれらの船舶が日本に開国を迫り利益独占を目論むようになる。今後この時期についても、国内水運を担った琉球籍、あるいは当時頻繁に往来したであろう中国籍、薩摩の船などの座礁を示す遺物散布を発見することも重要である。

Ⅳ期（近代）日本・中国・東南アジア地域との中継貿易を行った琉球も450年の王国の歴史に幕を閉じ、1879年明治政府の琉球藩廃止によって沖縄県となる。沖縄島では近世から昭和はじめ頃まで馬鑑（マーラン）船と呼ばれるジャンク船が国内水運を担っていた。p地点は国内水運を担った商船の積み荷が何らかの事情によって海底に沈んだ物と考えられる。陶磁器のみが採集されているが、他にも食糧等様々な物が物資として運ばれていたと推定する。多くの器種が採集されている点は消費地遺跡で出土する事例のセットに近く、特に厨子甕は墓以外では生産地でしか出土しないことを考えると海域からの採集は厨子甕を含んだ多くの陶磁器を消費地へ運ぶ途上なんらかの事由で海底に陶磁器が散布したものと考えられる。

本稿では触れなかったが、沖縄は国内唯一の地上戦を体験する激戦地として知られる。地上の戦跡の取扱について埋蔵文化財センターでも取り組んでいる。戦史上有名な、戦艦大和などの沈没も南西諸島海域徳之島沖とされている。地上の戦跡のみならず海域にはその歴史を伝える船舶が往来し、そして今もそこに沈んでいる。

今後の課題としてこれらの遺物散布地をどのように検討し、遺跡台帳などに登載していくのかということを考えなければいけない。こと、このような海底にある遺物散布地をそもそも遺跡として周知化するのか、行政的な保護策などは特に地元市町村によって担われている部分が大きく、これらは今後の大きな課題となる。

1970年代以降、陸上では開発によって多くの遺跡が滅失した。文化財保護法に基づいてこれを記録保存調査として緊急発掘を実施し救済している。沖縄は全国的に埋め立て面積を年々広げる海岸開発県である。現在頻繁に行われている、または今後も行われるであろう海岸の埋め立てや護岸工事、海岸開発の拡充は、今後の海底の埋蔵文化財の滅失を危惧せざるを得ない。埋蔵文化財を保護する立場として、この問題を真剣に考える必要があると思われる。

謝辞

このような作業途中でありながら今回発表することを行ったのには幾つか理由がある。その1つは遺跡の周知化と遺跡保存のためにも、埋蔵文化財として遺跡や遺物散布地があるという情報を共有することが大切であると考えたこと。さらには、埋蔵文化財の対象として遺跡や遺物をきちんと分析することが重要であると、作業を行ったメンバー共通の見解として持ったことからである。

作業をする中で知ることのできた知見の多くは、これまで各市町村で遺跡の保存にあたってこられた担当者の方々から情報をいただくことで整理できた。また、多くの方々から指導や助言いただき本小論を完成させることができた。末文ながら記して謝意を表す。

現地調査・資料整理協力

秋本真孝（元北谷町教育委員会）、小川光彦（金沢大学）、新城英樹（タイムマリン宮古）、仲宗根瑞香・新垣利津代・上原美穂子・大村由美子・我那覇悠子・金城恵子・金城敬子・崎原美智子・比嘉貴子・又吉純子（沖縄県立埋蔵文化財センター）、西銘章（嘉手納高等学校）、松永洋平（浦添市教育委員会）、山本祐司（株式会社クレール）、玉城靖・松本綾子（今帰仁村教育委員会）

指導・助言

江上幹幸（沖縄国際大学）、安里嗣淳・盛本勲（沖縄県立埋蔵文化財センター）、池田榮史・土肥直美・豊見山和行（琉球大学）、大濱永亘（八重山商工高等学校）、大濱永寛（石垣市教育委員会）、小川真司（イーフマリンホリデー）、小曾野善行（京セラミタジャパン株式会社）、川満邦弘（下地町教育委員会）、金武正紀（今帰仁村教育委員会）、金城亀信・中山晋（沖縄県教育庁文化課）、久手賢稔（久米島町文化財保存審議委員）、佐久田勇・中島徹也（久米島町教育委員会）、城間肇（宜野湾市教育委員会）、島袋綾野（石垣市史料編集室）、下地和広（城辺町教育委員会）、砂辺和正（平良市教育委員会）、砂川智男（上野村教育委員会）、玉井敬信、知念勇（恩納村立博物館）、得能壽美（石垣市立八重山博物館）、渡久山春好（多良間村立ふるさと民俗学習館）、中村悟・宮里芳和（座間味村教育委員会）、中村愿（北谷町教育委員会）、仲村渠智（ひろみ産業）、比嘉久（名護市教育委員会）、比嘉賀盛（沖縄市文化財調査審議委員）、前田一舟（与那城町海の文化資料館）、宮里清五郎（慶良間海洋文化館）、森本朝子（福岡市教育委員会）、山里克也（久米島自然文化センター）。

(みやぎ ひろき：今帰仁村教育委員会)

(かたぎり ちあき：調査課 専門員)

(あらかき つとむ：調査課 嘴託員)

(ひが なおき：浦添市教育委員会)

註1. 今帰仁村字諸志の海人から聞き取りすることのできた情報である。戦後海岸で壺を採集した。このとき壺の中に古銭が入っていたのでこれを鉄屑として鍛冶屋に売ったとされる。

註2. 遺跡名称の久米島はての浜は、宇検村教育委員会（編）1999年『倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村文化財調査報告書第2集に記載されるのが初出でありこれに従つた。本来は「ナカノ浜」にするべきとも考える。

註3. 上野村教育委員会より情報をいただいた。

註4. 1地点については過去に引き揚げ事例があり、現在も保管されているバラストがあるとされる。○地点については宮国採集の方柱状の鉄塊が採集品として解釈した。

引用・参考文献

- 赤嶺誠紀 1988年 『大航海時代の琉球』 沖縄タイムス社
エドワルド・ヘルツハイム 1995年 『ドイツ商船R.J.ロベルトソン号宮古漂着記』 上野村役場
大竹昭子 2002年 「矜持をもって生きる島」『Coralway』83 日本トランスオーシャン航空株式会社
大濱永亘 1994年 「名蔵シタダル遺跡について」『南島考古』No.14 沖縄考古学会
大濱永亘 1999年 「名蔵シタダル遺跡について」『八重山の考古学』先島文化研究所
沖縄県立博物館（編）1982年 『沖縄出土の中国陶磁器（上）』 沖縄県立博物館
奥のあゆみ刊行委員会（編） 1986年 『奥のあゆみ』 奥のあゆみ刊行委員会
金田明美 2001年 「多良間島沖で難破したオランダ商船ファン・ボッセ号の歴史的考証」『日蘭学会会誌』26-1
日蘭学会
岸本義彦ほか 1984年 『大宜味村の遺跡』 大宜味村文化財調査報告書第2集 大宜味村教育委員会
岸本義彦ほか 1999年 『伊江島の遺跡』 伊江村文化財調査報告書第13集 伊江村教育委員会
球陽研究会（編） 1974年 『沖縄文化史料集成5 球陽（読み下し編）』 角川書店
金武正紀 1990年 『沖縄の中国陶磁器』『考古学ジャーナル』320 ニュー・サイエンス社
金城亀信ほか 1998年 『首里城跡 京の内跡発掘調査報告書（I）』 沖縄県文化財調査報告書第132集
沖縄県教育委員会
新里堅進（翻案・作画） 1996年 『かがり火—ロベルトソン号救助物語—』 上野村役場
田畠幸嗣 1999年 「伊江島の貿易陶磁器」『伊江島の遺跡』 伊江村文化財調査報告書第13集 伊江村教育委員会
知念勇 1978年 「座喜味城の歴史と環境」『座喜味城跡』 読谷村文化財調査報告書第4集 読谷村教育委員会
當眞嗣一 1996年 「南西諸島発見の碇石の考察」『沖縄県立博物館紀要』第22号 沖縄県立博物館
當眞嗣一・佐久田勇 1999年 「久米島白瀬川河口採集の遺物について」『沖縄県教育庁文化課紀要』第15号
沖縄県教育委員会
鳥居龍蔵 1953年 「私と沖縄諸島」『ある老学徒の手記』 朝日新聞社
中村愿 1994年 「インディアン・オーク号の座礁地」『北谷町の遺跡』 北谷町文化財調査報告書第14集
北谷町教育委員会
仲村昌尚 1992年 「第3章久米島各字（大字）の小地名」『久米島の地名と民俗』 久米島の地名と民俗刊行委員会
野上建紀 1999年 「肥前陶磁の流通形態」『貿易陶磁研究』No.19 日本貿易陶磁研究会
林克彦ほか 1999年 『倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』 宇検村文化財調査報告書第2集 宇検村教育委員会
比嘉朝進 1990年 『波高し!漂流琉球船』 風土記社
前田四郎（編） 1967年 『沖縄産岩石鉱物図説』 琉球政府立理科教育センター
松岡史 1981年 「碇石の研究」『松浦党研究』2 松浦党研究連合会
森田勉 1982年 「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
柳田純孝 1994年 「碇石考」『法哈噠』第3号 博多研究会
宮崎亮一ほか 2000年 『大宰府条坊跡 XV・一陶磁器分類編一』 太宰府市の文化財第49集
琉球新報 1996年7月7日 「プロビデンス号の潜水調査へ」『琉球新報』朝刊（新聞記事）

※ 写真提供（遺物所蔵機関）

写真2・筆者撮影（奥交流館）

写真12筆者撮影（上野村野原公民館）

写真21~24筆者撮影（久米島町自然文化センター）

写真25~26筆者撮影（八重山博物館）

写真27~28沖縄県立埋蔵文化財センター提供（沖縄県立埋蔵文化財センター）

写真29~30筆者撮影（多良間村立ふるさと民俗学習館）

写真31~35筆者撮影（座間味村教育委員会）

写真36筆者撮影（慶良間海洋文化博物館）